

第 65 回日本西洋史学会 中世史部会報告要旨

神聖ローマ帝国におけるハプスブルク家“出現”の背景をめぐる研究

— アンデクス・メラン家の継承者としての視点から —

川西 孝男

本論は、13世紀後半に歴史の舞台に突如出現し、その後ヨーロッパ及び国際社会に影響力を及ぼしたハプスブルク家の先駆者が存在し、それがアンデクス・メラン家Haus Andechs Meranienであったという歴史的視点を提唱する。

12世紀後半のシュタウフェン朝において、アンデクス・メラン家は神聖ローマ帝国のヨーロッパ大陸における実質的な支配者となっており、近隣諸国にも影響力を拡大していたが、これを危惧する勢力によって13世紀半ばに滅ぼされる運命を辿る。しかし、彼らは新興のハプスブルク家ルドルフ1世の神聖ローマ皇帝擁立に関わるなど、アンデクス・メラン家の理念、支配地そしてヨーロッパにおける新たな統治システムがハプスブルク家に継承されていたことを例証する。

国家や民族、言語、文化が錯綜し、戦争の絶えなかったヨーロッパにおいて、新たな理想を掲げたアンデクス・メラン家が断絶後、ハプスブルク家に託したその精神と統治が今日に継承されていることに及びたい。